# べ つ の 道 を 歩 む
## ――レイチェル・カーソンの生涯――

上　岡　克　己

私は地球の美と神秘に一心に注目することによって、自分の生き方を形づくってきたのです。
カーソン「われらをめぐる現実の世界」

一通の手紙のなかの数行の文章のなかに、人生や著作に対する彼女の態度をうかがい知ることが出来る。
ブルックス『レイチェル・カーソン』

### 序　現状と課題

2007年（カーソン生誕100周年）、2012年（『沈黙の春』出版50周年）、2014年（カーソン没後50周年）と、レイチェル・カーソン（1907－64）をめぐる話題には事欠かないが、一般的なカーソンに対する認識度は思ったほど深まっていない感がする。実際のところ、レイチェル・カーソン日本協会は全国組織から地方組織重視に方針転換した。またアメリカにおいても、カーソン協会や生家協会の動きも見えてこない。しかしながら出版界において、カーソンに関する著作は着実に出版され続け、専門書の他にもとりわけアメリカにおいては青少年向けの伝記や絵本は人気がある。特に重視したいのは、アメリカにおいてカーソンの遺志を継ぐ環境文学作家が輩出し、カーソンの思想を語り継いでいることである。一方日本においては、東日本大震災や福島原発事故に象徴される環境カタストロフィがあり、少なからず著作は出版されているにもかかわらず、現在のところその評価は定まっていない。

本稿の意図は、カーソンの生涯をどのように効果的に教えるのかを教授法の視点から考察したものである。もともとは2012年開講「環境文化論」の講義用メモに準拠している。テキストとして、上岡・上遠・原共編著『レイチェル・カーソン』（ミネルヴァ書房、2007）を使用し、「カーソンの生涯」を３回（90分×３）にわたって述べたものである。本稿では言及しなかったが、講義中にカーソンの映像を適宜活用した。

ⓒ高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科

## 1　伝記の読み方、教え方

カーソンが『沈黙の春』執筆の過程を「ジクソーパズルのすべてのピースが、それぞれの場所にはまってゆくように」（リア　486）と形容したように、伝記作家の役割もそれに似たところがある。カーソンの生涯に起こった膨大なピース（事実）をいかに全体の枠のなかに埋め込んでゆくか、まさにそこに伝記作家としての手腕が問われるところであろう。カーソン自身は自伝を書かなかったが、それに取って代わる多くの著作（子ども向け雑誌に書かれた小品から、大学時代のレポート、学内文芸雑誌の掲載作品、大学院修了後に書かれた新聞記事、政府機関での広報文書、著書、講演原稿、その他おびただしい数にのぼる手紙まで）が残されており、カーソンの生涯はこれらの資料からかなり詳しく調べることが可能となった。伝記作家の役割はこれらの事実から本人の全体像構築へと筆を進めてゆくことになる。

伝記作家は時には研究者となり、大学図書館で資料を渉猟するばかりか、時には探偵になって秘事（プライバシー）を暴くことになる。一つ一つのピースがカーソンの生涯とどの程度関係があるか、それがいっときのものか、それとも将来にわたるものか吟味してゆく。カーソンの主たる伝記には、ポール・ブルックス / 上遠恵子訳『レイチェル・カーソン』Paul Brooks, *The House of Life: Rachel Carson at Work*（1972）と、リンダ・リア / 上遠恵子訳『レイチェル―レイチェル・カーソン「沈黙の春」の生涯』Linda Lear, *Rachel Carson: Witness for Nature*（1997）がある。これら二つの伝記は対照的で、前者がカーソンの著作からの引用を重視し、文学と科学の融合という視点から構成されているのに対し、後者は徹底的な事実第一主義を貫き、膨大な資料を駆使してささやかな事実まで詳細に言及している。本稿は後者のリアの伝記に多くを拠っているが、適宜ブルックスの意見も取り入れた。

リアはカーソンの生涯にわたってありとあらゆる事実を、まるで考古学者かのように埋没した資料の中から発掘する。1日で忘れられ、歴史の闇の中に消えてゆくものもあれば、いつまでも主人公の心に去来するものもある。例えばリアが指摘した以下のような事実はどのように受け止めればよいのだろうか。大学時代母親は頻繁に娘の寮を訪ねたこと、大学時代デートに誘われたこと、スピード違反を犯したこと、車でメインの別荘まで1000㎞を移動したこと、パーティー出席の際の服装、髪型、美容院、癌治療の際にカツラを使用していたこと、（どういうわけか、カーソンの食事については言及がない）。

一方でリアが今までの伝記の中で隠されていた事実を公表したことは、カーソンの実像に迫る画期的なことである。なかでも養子にしたロジャーが、姪のマージョリーと妻子ある男性との間に生まれた子どもであることだ。当時ベストセラー作家への道を突き進んでいたカーソンにとって、このような家庭内での不名誉は隠し通さねばならなかった。ただ事実は隠しても、ロジャーという子どもの存在がカーソンに大きな影響を与え

たことは、『センス・オブ・ワンダー』を読めば明白である。またカーソンが二人の姪の世話をし、さらにマージョリーの子ロジャーを養子にまでしたことは、とかく冷徹な科学者とみなされがちなカーソン像を修正するものである。後年、『沈黙の春』出版の際に敵対勢力から、ヒステリックな未婚女性、なぜか遺伝を心配する独身女と心ない言葉をかけられたが、彼女は一切無視している。繊細な彼女の心は傷ついたはずだが、敵の宣伝には沈黙を続けるのが最良だと判断したにちがいなかった。

同じく1960年に判明した乳癌について、彼女は敵対勢力に知られることを極度に恐れ、死ぬまで内密にしている。医療に関して、当時の最先端癌治療である放射線を受けているのは、放射線に対する懸念を抱き続けたカーソンの皮肉な現実である。さらにリアの調査はとどまることをしらない。詳しい病状は、まるでカーソンのカルテを見ているようだ。また葬儀、遺灰、遺言に関しても徹底的に調べ上げ、兄ロバートとの確執を指摘する。遺言ではロジャーの後見人についての希望が書かれ、さらに自然保護団体ネイチャー・コンサーバンシーとシエラ・クラブに多額の寄付がなされていた。

さて問題は、このような事実をすべて紹介するのが伝記を教授する最適の方法であろうか。限られた時間数の中で、やはり授業としては選択的であらざるをえず、彼女の生涯の中でも特徴的なエピソードを選び、それを中心に進めてゆく方が受講生、少なくともカーソン初習学生にとっては効果的ではないだろうか。今回はカーソンの生涯を便宜的に３部に分け、それを彩る５つのターニングポイントを提示した。具体的にはⅠ：誕生から20歳の大学生まで、Ⅱ：20歳から師スキンカーの亡くなる41歳まで、Ⅲ：41歳から亡くなる56歳まで。ターニングポイントとしては、１．20歳のときの専門の変更、２．ラジオの脚本書き　３．ベストセラー作家への道と姪の子どもを養子にしたこと、４．『沈黙の春』の衝撃、５．ドロシー･フリーマンとの文通。これらを織り交ぜながら、「夢の実現への挑戦と障壁」を軸に、カーソンの生涯を語る方針に決めた。

## ２　生まれた環境と家庭教育

カーソンの生涯、とりわけ彼女の知的成長に貢献し、自然観を育んだのは母親マリアであったことはよく知られている。彼女の自然観がどのように形成されていったのかを調べていくと、そのプロセスは変化に富み大変興味深いものがある。多くの批評家がまず指摘するのは、彼女が自然に関心を持つに至った要因に、①生まれ育った故郷の環境がある。彼女の家はペンシルベニア州スプリングデールという小さな町の、小高い丘にあった農場（果樹園）の中にある。家の周囲には多くの生きものが生息し、植生も豊かであった。ここには人間と自然との乖離は感じられず、すべては友達同士の関係で成り立っていた。幼い頃からごく普通に自然を友とする生活が、彼女の自然観の出発点となった。

②その自然観を育み成長させたのが母親のマリアである。彼女は娘とともに戸外で多

くの時間を過ごしている。後年カーソンは「われらをめぐる現実の世界」の冒頭、「自然界やそこに棲む生物に強い興味を抱いていました。そうした興味は母から受け継ぎ、つねに母と分かちあってきたものです」（『失われた森』205）と語っている。また教育に熱心な母親で、当時流行していた自然学習――「教師や親たちが子どもに身近な自然を直接観察させながら、自然のさまざまな様子を心で感じとるように導くもの」（服部144）――を取り入れて娘に教えたことが挙げられる。

③さらにカーソンの自然観形成に大きな役割を果たすことになる文学への関心を、マリアが読書を通して娘に教えたことである。カーソンの少女時代から学生時代にかけての読書量は膨大で、自然への想像力は尽きることがなかった。彼女のお気に入りの作家は、少女時代はビアトリクス・ポター、アーネスト・トンプソン・シートン、ジーン・ストラットン・ポーター、ハーマン・メルヴィル、ジョセフ・コンラッド、ロバート・ルイス・スティーブンソン、学生時代や非常勤講師時代はヘンリー・メジャー・トムリンソン、ヘンリー・ベストン、ヘンリー・ウィリアムソン、リチャード・ジェフリーズであった。

④大学・大学院で生物および海洋生物学を研究したこと、および漁業局に就職して、さらに自然への理解を深める分野に進んだこと。⑤第二次大戦以降、自然ばかりか人間環境をも含む環境の異変を再認識し、エコロジカルで環境倫理的な自然観へと発展していくことになる。シュバイツァーの著作から自然や環境への啓示――自然を破壊して豊かさを求める自己中心的な生き方を改め、他の生きものと共生してゆくこと――を得るのはこの時期である。いずれにせよカーソンの自然観が単一の要因に影響を受けたのではなく、いくつかの過程を経ながら徐々に成熟していったと考えるのが妥当であろう。[1]

一方父親ロバートに関して、どの伝記でも簡単に触れただけで、その上カーソン自身がほとんど父親について語っていないこともあって、父親像は希薄である。確かに教養ある母親、いつも尊敬に値すると慕った母親と比較すると、父親の存在感があまり感じられないように見える。では実際ロバートは娘レイチェルに何も与えなかったのだろうか。リアの伝記を読む限り、父親は飲んだくれでもなく、軽薄な男でもない。だらしないところも多少あったようだが、貧しさの中、一家（夫婦と３人の子供）の生活費を稼ぐために努力していたことは確かである。リアの伝記を詳細に検討してみると、父親が娘に与えた影響が思いのほか鮮明に描き出される。

父親の趣味が写真であったことは意外と知られていない。カーソンの幼い頃の写真が数多く残されているのは、彼のおかげである。リアの伝記にはレイチェルが愛犬キャンディーに本を読み聞かせている５歳前後の写真が、テキストには花を持った小学生の頃の写真が掲載されている。よく見るとどちらも自然を背景としている。娘に対する父親の最大のプレゼントは実はこの背景となった26ヘクタールの農場（果樹園）にあったことだ。ロバートのもくろみは、ピッツバーグの発展を予想し、郊外のスプリングデールの小高い丘を不動産投資のために借金をしてまで購入したのである。一家はこの地を切り売りしながら、生活費の捻出を余儀なくされたが、幼いレイチェルの教育環境には申

し分のない地となったことは明白である。生まれた時から身の周りは果樹園を含む雑木林で、家畜や小動物、鳥たちがいつも彼女の友達であった。

カーソンがペンシルベニア女子大学に入学した時、両親と３人で写した写真が残っている。そこには優しく娘を見守る父親が写っている。父親にとっても自慢の娘だった。その後ジョンズ・ホプキンズ大学大学院に進学し、ボルティモアで生活を始めると、両親もスプリングデールの土地を売り払い、娘とともに住み始めた。しかし父親は娘の大成を見届けることなく1935年71歳でこの世を去った。娘レイチェルが父親をどう思っていたかは明確ではない。後述するドロシーとの書簡集の中でも言及されることはなかった。リアは「レイチェルは……いつわりの口実を人に言わなければならない引け目から解放された」(117)、「マリア・カーソンは夫の死後、家庭的にも個人的にも、ある程度の自由を手に入れたのだが、それはおそらく、末娘にとっても同じであったに違いない」(117) と、妻からも娘からも疎んじられていたロバート像が提示される。リアの指摘は客観的には正しいかもしれないが、謙虚さを常に維持していたカーソンが父親の恩を忘れるとは思われない。決して他人に驕ることなく、自然に対しても謙虚さを持ち続けたのがカーソンの品性であるからだ。

## 授業方法

１学期90分15回の授業のうち３回分をカーソンの生涯にあてる。通常のアメリカ文学の講義ではありえないことは十分承知の上、あえてカーソンの生涯にこだわった。というのも筆者自身がカーソンの生涯に感動し、その感動を学生に伝えたかったからにほかならない。それだけカーソンの生き方は魅力的である。もちろん時間的制約は避けられないところで、いかにカーソンの真髄を要領よく伝えるか、これは究極のところ、教員の教授法に拠るところが大きい。筆者はカーソンの生涯から学生の興味を喚起させるような人生の一コマを選び、精一杯生きた一人の人間像提示に努めた。

カーソンの生涯はテキスト第１章「レイチェル･カーソンの生涯」に描かれており、授業もそれに沿って進める。カーソンの生涯については、リンダ・リア『レイチェル――レイチェル・カーソン「沈黙の春」の生涯』が出版されて以降、実像が明らかにされた。一般的な印象では、孤独で内気な性格、冷たい科学者を連想させるが、リアは女性差別の激しい時代に勇気をもって立ち向い、真理を求める自立した女性と定義する。筆者もその方向でカーソン像を描いて見せた。ただ注意しなければならないのは、自由と仕事を優先したため結婚することはなかったが、後述するように、家庭に恵まれなかったわけではなかった。むしろ家庭的な、子どもを愛する側面を軽視すれば、カーソン像を見誤ってしまうことになる。

## ３　人生のターニングポイント

だれしも人生の分岐点に直面して、どちらかの道を選択せざるをえない時機がある。受講生の学生も本学を選択したときが、人生の重要なターニングポイントの一つであり、次は就職のときだろうと語る。『沈黙の春』の最終章「べつの道」（“The Other Road”）でカーソンはアメリカの詩人フロストの有名な詩「行かなかった道」“The Road Not Taken”を引用し、人類がこれから先歩むべき道を示唆しているが、まさしくそれは「あまり人の通らない」困難な道を選ぶこと意味していた。カーソンもまさしくその道を選んだ。人生の分岐点は数多くあるが、ここでは主要な５つのターニングポイントに焦点をあて、カーソンの実像を浮き彫りにしたい。時間との関係で履修学生の心に感動と共感を呼ぶ方法を選択した。

第１は、大学２年生の時に専攻を英文学から生物学へと変える決心をしたことである。当時女性にとって英文学（アメリカでは国語）の方がはるかに就職には有利であった。というのも差別や偏見の厳しい時代で女性が唯一能力を発揮できる場所が教員であったからである。それを押しのけて、生物に専攻を変えたのは、子どもの時から生物に関心をもっていたとはいえ、ひとえに生物学の教授スキンカーの影響が強い。カーソンはスキンカーの真摯な探究心と熱意のある授業に惚れ込み、彼女の生き方と自らの将来を重ねたのであった。教員の一人として、このような授業ができるスキンカーが羨ましくも思う。さらにテニスンの詩「ロックスレー・ホール」の一節「稲妻を抱きて吹く激しき風をのみ込み / 雨　雹　炎も雪も　ロックスレー・ホールに降らば降れ / 風が海へとうなりをあげて吹く　我　いざ漕ぎ出ださん」が彼女を後押しした。好きで選んだ道、あえて海洋生物学という女性にとってはまだ未開の領域に歩み出したが、生物学者への前途は多難、運悪く世界恐慌という時代の洗礼を受けた彼女にとって、ジョンズ・ホプキンズ大学大学院に進学したものの、将来の展望は全く見えてこなかった。

そのころ彼女は思いもかけず第２のターニングポイントに直面する。1932年修士号を得て、大学の非常勤講師をしながら家計を助け、できればスキンカーのように大学の正規のポストを望んでいたが、博士号を持つわけでもなく、まして海洋生物という特殊な分野において女性研究者としての生き方は事実上閉ざされていた。相変わらず先の見えない中、彼女はスキンカーを通して以前一度会ったことのある漁業局科学調査部長ヒギンズを訪ねた。このとき漁業局は「水の中のロマンス」という７分間のラジオ番組の脚本を書ける人物を探していたところであった。ヒギンズはカーソンにそれをすすめた。思いもかけぬ提案がカーソンの生涯を変えた。幼い頃からの文学的才能と、大学院での海洋生物の研究がここに見事に融合したのである。カーソンは脚本を書き上げてヒギンズに応え、さらに翌年公務員試験を受検して合格し、漁業局に入局した。ヒギンズの貢献はまだある。ラジオの脚本のほかに政府発行のパンフレットをカーソンに依頼し、彼女が書き上げた作品のレベルの高さを評価して、それを『アトランティック・マンス

リー』誌に送るようにとアドバイスしたのである。これが後に「水のなか」として掲載され、カーソンが文壇に認められる契機となったのである。彼女の第１作『潮風の下で』は、これまた運命のいたずらか、運悪く太平洋戦争勃発と重なって世間からは無視されたが、長年漁業局（1939年からは魚類野生生物局に改称）に勤めたことが、海の作家として花開く礎となった。

第３のターニングポイントは、すでに述べたように、結婚こそしなかったが、早逝した姉の二人の姪を母親とともに養育し、さらに姪の一人マージョリー自身も幼い子どもロジャーを残して亡くなると、カーソンがロジャーを養子にして育てることになった。カーソンには家庭を顧みない冷徹な科学者のイメージがつきまとうが、事実は逆で、家庭と子どもを大切に扱っている。出自はどうであれ、ロジャーという子どもに接することで、後の名作『センス・オブ・ワンダー』が書かれるに至った。

第４のターニングポイントも思いがけず訪れた。1950年代半ば数々の賞を受賞して名実ともにベストセラー作家の仲間入りを果したカーソンは、1958年１月ある一通の手紙を受け取った。差出人は知人のオルガー・オーウェンズ・ハキンズ。彼女が所有する土地（鳥類保護区）の鳥がＤＤＴ散布により次々と死んでいく事実を明らかにし、カーソンにその事実を公にしてほしい旨の内容であった。最初カーソンは自分は適任ではないと渋っていた。その理由は、彼女の専門は海洋生物であって、いわゆる人工化学合成物質やその人体に及ぼす危険性、特に医学の分野の知識が不十分であったからである。しかしながら調査すればするほど生態系は悪化し、その影響は人間にも及んでいることを察知したカーソンは、自らの内なる声に忠実であろうと決心した。「事態を知っているのに沈黙をつづけることは、私にとって将来もずっと心の平穏はない」（リア　470）ことを悟っていたからだ。このようにして『沈黙の春』は誕生した。彼女は正確を期するために多くの文献にあたり、不明な箇所は直接研究者と連絡をとって確認している。まさに真理の探求者である。

『沈黙の春』執筆に専念していた最中、彼女の身体は癌に冒されていたことが判明した。『沈黙の春』執筆は壮絶な癌との闘いのなかで行われていたのである。1962年彼女は終に書き上げた。この本がアメリカ、いや世界を変えたのだった。

第５のターニングポイントは今までのような劇的なものではなく、どちらかと言えば静かに始まり十数年続いた。カーソン晩年の難しい時期に、彼女を側面から支え続けた人物がいたことが明らかにされた。リアの伝記を読むとカーソンは孤高な作家ではなく、多くの知人がいることがわかる。そのなかでも自らの心を打ち明けかつ心の支えとなってくれる人は、母親、そして今はなきスキンカー先生、そして晩年に文通をはじめたドロシー・フリーマンしかいなかった。晩年の12年間に及ぶ二人の文通から、新しいカーソンの姿が浮かび上がってきた。ドロシーの孫娘マーサ・フリーマンが編集した『カーソン＝フリーマン書簡集――1952－1964』（1995）を参考に、晩年のカーソンの生き方を検証した。カーソンは自伝を書かなかったので、書簡集は晩年の彼女の内面まで明らかにしてくれる貴重な資料となった。

## ４　事実の詳細

### ペンシルベニア女子大学――原点は学生時代

カーソンがどのような学生生活を送ったのか、同世代の受講学生にはもっとも興味のあるところである。カーソンがまだ子ども時代の1910年代、子ども向け雑誌『セント・ニコラス』が発行されていた。この雑誌には後のフォークナー、フィッツジェラルド、Ｅ・Ｂ・ホワイトなどそうそうたる会員の作品が掲載されていた。カーソンも11歳から15歳にかけて５編の作品が掲載され、名誉会員の称号を得ている。文学的才能をもった少女だったのは確かである。「いつかは作家になるという固い決心」（リア　37）を持ったのも当然である。文学少女に特徴的なように、彼女は母親の影響もあってか大学入学以前から相当の文学作品を読んでいたことが知られている。しかし『セント･ニコラス』誌以外の雑誌に掲載されることはなかった。

学業成績もよかったので、両親は娘に大学進学を勧めた。その大学はペンシルベニア女子大学で、実家からさほど遠くなく、しかも地方の私立女子大学（１学年70人の小規模な教養系大学）としては評価が高かった。当時の女子大学に典型的な良妻賢母を養成するキリスト教精神に則った女子大学であるので、両親も安心して入学を勧めたと思われる。唯一の不安は学費の件で、カーソン自身は奨学金を得、父親は土地を切り売りし、母親はピアノを教えるなど娘の大学生活を支えた。カーソンも両親の気持ちを痛いほど理解し、大学生活を始めても頻繁に会っていた。作家になる夢は捨てていなかったが、たとえそれが不可能でも卒業後は英語の教員になる道は開かれていた。教養部系の大学だったので、医学、法学、科学などの専門分野へ進む学生は限られていた。

大学１年の時に書かれた作文「自己紹介と入学の理由」（“Who I Am and Why I Came to P.C.W.”）[2]では、「より完全な自己実現をはかり」、「広がる夢を見据えていこうという新たな気持」、「人間はより高い可能性を求めて進んでいかないなら、人生になんの意味があるのだろうか」（53）と述べ、明確に大学入学の意志を表明していることは受講学生にも大きな刺激となろう。

さてこのように高い志を抱いた女子学生は、20歳の時に人生最大のターニングポイント（分岐点）を迎える。これを機に彼女の人生は全く新しい方向へと進んでゆく。驚くべきことに彼女は専攻を英文学から生物学へと変える決心を固めたのであった。カーソンの突然とも思われる専門変更は、多くの人々の間に軋轢を生じさせた。その決断は特に英文学科の教授たちの期待を裏切るものであったし、娘に夢を託していた両親にとっても失望は大きかったにちがいない。それらをすべて承知の上、あえて彼女は困難な道を選択した。その背後に一体何があったのか。カーソンの生涯を辿る者にとって最大の関心事の一つである。1920年代、文学と科学が融合するなどは考えられず、科学を専門とすることは創作活動、つまり作家への道を自ら閉ざすことを意味していた。成人になるまであれほどの文学少女だったカーソンの心に何が起きたのか。まず最初に考えられ

るのは、学内文芸誌『イングリコード』に掲載されるほどの作品は書き上げていたが、他の文芸誌に投稿しても採用されず、自らの文学的才能に限界を感じていたのではないかということである。そのようななか、メアリー・スコット・スキンカー教授の生物の授業を受講し、感銘した。これこそ彼女の人生を変える大きなターニングポイントとなったのである。

## スキンカー（1891〜1948）の生き方

スキンカーは15年間の小中教員を経て、コロンビア大学大学院に進んだ。そこで動物学修士号を得てペンシルベニア女子大学に赴任したのは34歳のときであった。彼女の明るい社交的な性格は、地方女子大学の校風とは異質のもので、まして専門分野が生物であったので、学生たちの多くは必修の授業としてのみ受講していた。カーソンも最初は必修の生物学の授業として受講していたはずだが、リアも述べているように、「スキンカー女史こそがレイチェル・カーソンの人生を一変させた人物なのである」(58)。すでに見てきたように大の自然好きであったカーソンは、スキンカーを通して「生物学は自然を愛するためのもう一つの方法」(63) であることを知ったのである。

生物学への傾斜を強めていった背景には、スキンカーの授業方法、例えば実験室を離れて郊外の野原を散策し、野外調査をするなど楽しい一面もあったことは確かであるが、スキンカー自身の教育者・科学者としての生き方に共鳴したところが大きい。多くの学生に見られるように、大学時代は自分探しの時期と重なる。不安と夢が交差するなかで、若い学生は自らの理想的人間像、換言すれば精神的指導者（メンター）を追い求める。カーソンの場合、スキンカーとの出会いがまさしくメンターとの出会いであり、彼女はスキンカーの生き方に自己を重ね合わせる。16歳年長のスキンカーは教員としても研究者としても真理を探究する理想的な科学者に映った。女性への差別や偏見の強いなかで、スキンカーの科学者としての行動や姿勢はカーソンを感動させるものであった。20歳を契機にカーソンはスキンカーを師と仰ぎ、彼女を生きるモデルとして女性科学者の道を歩む決心をしたのであった。これは強固な意志と勇気をもって、あえて困難な「べつの道」にチャレンジする後のカーソンの人生を象徴する出来事、まさしく人生最大のターニングポイントとなったのである。

後年、なぜ生物学に魅せられたのかを次のように語っているが、おそらく20歳のときも同じ考えであったことが想像される。

> 生物学は、生きている地球に棲む、生きとし生けるものを扱う。色や形や動きに喜びを感じ、生命の驚くべき多様さを認識し、自然の美しさを楽しむことは、生物としての人間の持つ生まれながらの権利である。生物学の最初の出会いは、できることなら、野原や森や浜辺などで、自然を通じてであってほしい。そして、それを補足し確認する手段として、実験室での研究があるべきだ。最高の才能と想像力に恵まれた生

物学者のなかには、生物学との最初の出会いは感覚的な印象や感動を媒介にしていた、という人々もいる。もっともすぐれた著作の大部分は――知識人を対象に書かれたものであっても――人類をも含む生命のたゆまぬ流に対する、感動に根ざしている。現在、容易に手に入れることのできるハドソンやソローのような偉大なナチュラリストの著書は、このことを示す代表的な作品であり、生物学の分野の著作として権威ある地位を占めている。（『失われた森』231）

スキンカーは自らの研究を深めるためにペンシルベニア女子大学を休職し、ジョンズ・ホプキンズ大学大学院に進み、その後ウッズホール海洋生物研究所に移った。そのため授業を楽しみにしていた4年生のカーソンをがっかりさせることになった。しかし自分も師の後を追い、ジョンズ・ホプキンズ大学大学院に進学することを決意し、最終的に入学は認められた。1929年大学卒業後、彼女はスキンカーの薦めもあってウッズホール海洋生物研究所で6週間の研修が認められた。このとき初めて海を見ることになるのだが、この地は海洋生物を研究する者にとって聖地なのである。スキンカーはさらにカーソンの将来に大きく関わってゆく。当時の漁業局の科学調査部にいたエルマー・ヒギンズを訪れて、助言をもらうようにと薦めたのである。カーソンとヒギンズとの出会いが、後のカーソンの運命をさらに大きく変える契機になろうとは、両者ともそのときは考えだにもしなかった。6年後の1935年、カーソンは再びヒギンズのもとを訪れた。そのとき、ヒギンズは漁業局で担当していたラジオ番組「水のなかのロマンス」の脚本書きを探していたところであった。カーソンは自らの文学的才能と科学的知識とを見事に融合した脚本を仕上げ、ヒギンズの要求に応えた。そして最終的にカーソンは漁業局という政府機関に就職が決まるのである。

一方スキンカーは体調を崩し、ワシントンにある姉の家にしばらくいた。その後農務省で寄生虫を研究しながら、念願の博士号をジョージ・ワシントン大学から授与されたが、大学のポストに就くことはなかった。その後ニューヨークにある女子寮の寮長を勤め、最後はイリノイ州の教員研修所で再度教職に就いている。このときに癌で倒れ、連絡を受けたカーソンはスキンカーの入院先を見舞った。病室で師は愛弟子に最後のメッセージを伝えたと思う。おそらくは女性科学者としての信念を貫くようにと言ったのかもしれない。1948年12月スキンカーは57歳の生涯を終えた。カーソンがベストセラー作家となることを知らないままに。リアも述べているように、「スキンカーの人生は実際はふさわしい職業に恵まれず、苦しいものであったが、カーソンには勇気と自立と達成の手本になるものであった」(218－19)。彼女は女性科学者として生き抜くのには過酷な時代を経験し、運命に翻弄され続け、決して自分が望んだ人生ではなかったかもしれないが、小さな女子大でカーソンと出会い、彼女の才能を十二分に開花させることに貢献したことを考えれば、カーソンの最大の恩人と言える。

## 海への関心

海とは無縁の内陸深く入ったペンシルベニア州ピッツバーグ郊外の小さな町で生まれ育ったカーソンが、なぜ海に関心を持ち続けたのか、これも「カーソンの生涯」を辿る上で避けて通れない問題の一つである。一般的には、幼い頃暖炉の上に置かれた貝殻に耳を澄まし、波の音に想いを馳せたこと、家の農場で魚の化石を見つけたことと関係があると言われてきたが、これだけでは説明できないもっと深い理由があるはずである。それはおそらく十代で読んだ海に関する本が影響しているのではないかと想像される。というのも大学時代に書かれた「船の灯という家の主人」(“The Master of the Ship's Light”)[3]について、リアは「大学に入って最初に書いた海に関する物語である。海も海岸も見たことがなかったにもかかわらず、おどろくほど鮮明に場面設定をしている。彼女がいかに長年にわたり海に関するすばらしい文学作品の数々を、読みつづけてきたかということがうかがい知れる。この物語は、『イングリコード』に掲載された最初の作品である」(55)と述べている。リアが言う「海に関するすばらしい文学作品の数々」とは具体的に何を指すのだろか。

すでに触れた「自己紹介と入学理由」のなかで、カーソンは読書好きであると語り、その後で英米文学の主要作家名を列挙している。英文学では、シェイクスピア、ミルトン、ディケンズ、スコット、テニソン、ブラウニング、ラスキン等。米文学では、アーヴィング、ロングフェロウ、ブライアント、ポー等を挙げ、自分が一番好きなのはユーモアがあり、偽善を告発したマーク・トウェインであると明言している。トウェインについては、リアも、また文学に造詣の深いブルックスも一切言及していないのはどうしてなのか。伝記作家の見落としか、それとも重要視していなかったせいだろうか。しかしながら『沈黙の春』における偽善の追究はトウェインそのものである。カーソンの大学時代の資料はチャタム大学（旧ペンシルベニア女子大学）で公開されているので、今後この資料を参考に新しい論考がなされることを期待したい。

「自己紹介と入学理由」において、海に関する言及は一切ないが、後年いくつかの場で海の魅力や文学を語った箇所があるので、彼女の海に対する関心の過程を探ることにしてみよう。

> 私は生まれてこの方ずっと、海に魅せられてきました。この目ではじめて海をみる何年も前から、海のことを考え、夢に見たり、どんな場所か心に思い描いたりしていました。スゥインバーンやメースフィールドなど、偉大な海の詩人が大好きでした。作文の授業では、海を舞台にした物語を書いたものです。大学では生物学に興味を持ち、ごく自然に海洋生物学を選びました。そして、ウッズホールの海洋生物研究所で、待ちに待った海との出会いをようやく果したのです。……海に対する私の第一印象は感覚的、感情的なものであって、科学的な知識は後からきたものなのです。(『失われた森』116－17)

1951年12月２日付けの『シカゴ・サンデイ・トリビューン』紙では、「海が世界の詩人に残した印」という題のもと、「海はいつもあらゆる時代の詩を通して詩人と詩人の想像力に霊感を与えてきた」と述べ、メースフィールドの「海洋熱」（“Sea Fever”）と「路」（“Roadways”）、英文学の古典で作者不詳の「船乗り」（“The Seafarer”）、シェイクスピアの作品、コールリッジの「老水夫行」（“The Ancient Mariner”）、スウィンバーンの詩、ジョン・キーツが感銘したというシェイクスピアの『リア王』の一節「それ、潮騒が聞こえよう？」、そして大学寮で読んだアルフレッド・テニソン「ロックスレー・ホール」（“Locksley Hall”）の「風が海へとうなりをあげて吹く／　我／　いざ漕ぎ出ださん」を引用する。後年ドロシー宛の手紙の中で、「その詩の一節は私の内側にあるなにかに語りかけ、進むべき道は海へとつながっている、私の運命は海と関係があると教えてくれた」と語っている（浅井　50、ブルックス　20）。また同日の『ワシントン・ポスト』紙では「海の本の宝箱」という題のもと、「偉大な海洋文学ですぐに思い出すのは、コンラッドとメルヴィル」と語り始め、コンラッドでは『海の鏡』、メルヴィルでは『白鯨』を挙げる。その他トムリンソンの『海と密林』が挙げられている。海というと遭難しかかった船や嵐の描写が主と思われがちだが、カーソンは詩情豊かな海の描写が好きと語り、その代表作としてヘンリー・ベストン『ケープコッドの潮風』を挙げる（ただこの作品は1928年出版で、カーソンが読んだのは大学院時代だと推定される。同じくウィリアム・ビービー『深海探検記』（1934）も成人以後の読書体験である）。

海の文学のアンソロジーとしてよく知られたものに、*The Norton Book of the Sea*（1989）, *The Oxford Book of the Sea*（1992）, *The Oxford Book of Sea Stories*（1994, 2000）がある。このなかで、*The Norton Boo of the Sea* と *The Oxford Book of Sea Stories* は、いわゆる航海ものや海戦もの、船上生活や過酷な海の自然を扱ったもので、後者の編者トニー・タナーは海の文学の特徴として、「男」、「勇気、臆病、パニック、恐怖、懐疑心、退屈、敵対心、ユーモア、決意、忍耐、狂気」（xiii）と語り、まるで海の文学は男の世界の象徴であるかのように捉えている。おそらくエコフェミニストからすれば異論が出ることであろう。一方 *The Oxford Book of the Sea* の編者ジョナサン・ラーバンはあえてそのような航海ものを避けて、本当の海の姿や詩情・想像力の世界としての海を扱っている。したがってこのアンソロジーには、カーソンの挙げた多くの古典詩人の作品や、彼女自身の『われらをめぐる海』の一節が選ばれている。詩的な海の文学と言えば、アン・モロウ・リンドバーグの『海からの贈り物』（1955）を挙げる人も多い。同年に『海辺』を出版したカーソン自身も、『海からの贈り物』への賛辞を忘れることはなかった。

海に対するカーソンの関心を理解する一つのヒントが、後年に書かれた「クロード・ドビュッシー作曲『海』のアルバム解説」（1951）の中に読み取れる。

> 海とはいったいなんだろう、そして、海のどこに、人間の心をかくも強く掻きたてる力があるのだろう？とらえどころのない、それでいて切り離しては考えられない、

海の神秘とはなんだろう？海は地球そのものとほぼ同じほど古いのだから、おそらく、神秘の一端はその古さのなかにあるのだろう。……海の魂は、あらゆるものを引きこみ、圧倒し、貪り、破壊する、容赦のない厳然たる力……海の神秘は生命の神秘そのもの……海が持つ輝く美と驚くべき力と永遠の神秘…。(129－30)

海に関するある特定の文学作品がカーソンに影響を与えたというよりは、様々な海に関する文献を読むうちに海への関心が高まってきたように思われる。カーソンの海に対する感性は、男性中心の航海物語や海戦物語ではなく、海の持つ豊かな詩情と想像力が海の生態学と融合したものである。その中核に、ブルックスも述べているように(21)、「センス・オブ・ワンダー」の世界があったのは間違いあるまい。現代からすれば、海の文学が一般大衆に受け入れられたという事実に違和感を覚えるが、第二次大戦後、戦争という現実からの逃避と、人間活動とは無縁の神秘性や永遠性をもつ海に希望を見出したことは十分考えられる。

## 5　書簡集をめぐる問題

カーソン自身は人前で自分の生い立ちを語ることはほとんどなく、自伝も書かなかったので彼女の私生活は推測の域を出なかった。ただ性格的に筆まめで、しばしば多くの人と手紙を通してコミュニケーションを図っている。しかし大半がビジネスライクなもので、赤裸々に自分をさらけだすことはなかった。彼女が晩年の十数年間、ドロシー・フリーマンという女性と手紙を交わしていたことは一部の人には知られていた。実際のところ、海の三部作の三作目『海辺』(1955)は、「ともに引き潮の世界を訪ね、その美と神秘を分かちあった」フリーマン夫妻に捧げられていることから、カーソンはドロシーに会ってすぐに彼女の人間性を見抜いたようだ。1995年にドロシーの孫娘マーサ・フリーマンが『レイチェル・カーソン＝ドロシー・フリーマン書簡集――1952－1964』(*Always, Rachel: The Letters of Rachel Carson and Dorothy Freeman, 1952-1964*)を出版して、カーソンの伝記研究は飛躍的に発展するに至った。

二人の関係は、1952年ドロシーが以前から住んでいたメイン州サウスポートの別荘近くにレイチェル・カーソンが別荘を建築するということを新聞で知り、歓迎の手紙を送った時に始まる。翌年の1953年７月12日には初めて直接顔を合わせている。以降カーソンが亡くなる一ケ月前の1964年３月までの12年間に、おそらくは1000通を越す手紙が交わされた。[4] 最初の頃は、二人の共通の話題、季節の移ろい、話題の本、共に年老いた母親の介護をしていたこと、幼い孫(カーソンの場合、姪の息子、後に養子とするロジャー)、海への関心などが中心であったが、後の手紙はカーソンの著作の執筆過程が明らかにされたばかりか、家庭内や健康の問題、作家としての使命観や人生観など今までのカーソン伝を補う新しい発見があった。カーソンの生涯を知る上で貴重な資料が公

にされたのであった。

マーサによれば（xiv）、ドロシーは1898年マサチューセッツ州に生まれ、現在のフラミンガム州立大学を卒業、ニューヨーク州で家庭科を教えた後、マサチューセッツ州農業局農協出張所で家庭科を教えた。その際に現マサチューセッツ大学で農業を勉強していたスタンリー・フリーマンと知り合い、結婚。一人息子スタンリー・フリーマン・ジュニア（マーサの父親）をもうけた。夫は農業関係の仕事に就き、ドロシーは結婚後仕事を離れ、家庭に入った。文学と音楽、ガーデニングを愛し、友達と文通するのを楽しみにしていた。1953年７月カーソンと出会ったとき、ドロシーは55歳、カーソンは９歳若い46歳であった。なおカーソンはワシントン郊外のシルバースプリング、ドロシーはボストン郊外のブリッジウォーターに住んでおり、二人は約700㎞離れて暮らしていた。

さてこの書簡集を前にして、多くの素朴な疑問がわきおこる。遅筆を自認し、毎日が執筆で多忙なカーソンがなぜドロシーに限って12年間も手紙を書き続けたかである。二人の間があまりに親密で、同性愛者との誤解を招きかねないものは焼却処分されており、さらに公表されなかったものを含めれば1000通を超える手紙、これは毎週手紙を書いたことに相当する頻度である。夏期には別荘で直接会い、緊急時には電話での会話ができたことを考慮すると、手紙の数としてはかなりの多さと思わざるをえない。

カーソンはドロシーに、ドロシーはカーソンに何を期待したのであろうか。ほとんどカーソンからの一方的とも思われる手紙が多いのも書簡集の特徴である。ドロシーの方は最初高名な作家からの手紙に当惑しながらも徐々に手紙の交換に意義を見出し、丁寧な返事であたたかくカーソンを包み込んでいる。両者の間はいつしか友情から愛情へと変わっていった。1953年と言えば、カーソンはベストセラー作家への道を歩みつつあった。ベストセラー作家と言えば聞こえはいいが、一方でプライバシーはなきに等しく、彼女は精神的にまいることも多々あったようだ。家庭内の問題、後には健康問題や『沈黙の春』をめぐる騒動で、カーソンは精神的に一種の鬱状態に陥っていたのではなかったか。リアやブルックスはそこまでは言及していないが、極度のストレスからの逃避が彼女には必要だったのだろう。スキンカー亡き後、自らを精神面でサポートする人物を無意識のうちに探していたように見える。

文学的能力が高く、しかも気さくで明るいドロシーとの手紙のやりとりに、高齢の母親や著作代理人マリー・ローデルにとって代わる癒しの対象を求めたのではないだろうか。

1954年２月６日の手紙には、「私を人間として深く愛してくれる人、ときには押しつぶされそうな創造的な努力の負担を、自分のことのように受けいれてくれる包容力と理解の深さをもつ人、相手の心の痛みや心身の疲れ、ときに訪れる絶望感に気づくことのできる人―私や私が創ろうとしているものを慈しんでくれる人がいる、そのことが、私にとって欠かせないということです」（Freeman 371）。手紙の中で happy, happiness が繰り返され、「あなたからのどの手紙も幸福感をもたらしてくれるものです」（44）とも

語っている。夫のいないカーソンには心の中を語り合える人物が必要だった。最終的に養子にしたロジャーの世話や、高齢の母親の介護はカーソンには荷が重すぎた。彼女には作家としてやらなければならない責任ある使命があった。そのバランスを取るためにも、同じ境遇の中で、優しく包み込んでくれるドロシーの愛に救いを求めたのかもしれなかった。「あなたは私の生活においてなくてはならない役割を果たしてくれた……私の生活において空虚な場所を埋めてくれました」(250)。亡くなる前の年の1963年２月、カーソンはドロシーに次のようなお礼の手紙を送っている。「この10年、悲しみ、悲劇、問題、深刻な病気……あなたのいない歳月は想像できない、あなたがいたからこそ楽しかったのです。つらいことにも耐えられました。これからもそうでしょう」(434)。

一方ドロシーの方も「私の人生を豊かにしてくれた……生きている限りはこの絆は存在する」(206) と好意的に受け入れている。文通を続けていくうちに二人ともお互いになくてはならない存在であることに気づき始める。彼らが分かち合った時間は「時の中のオアシス」(506、525、541) とまで言う。1963年１月24日、残された時間が少ないことを悟ったカーソンは、ドロシー宛に遺書を手紙の形で書いている。この手紙は結局カーソンの死後ドロシーの手に渡る。そこには感謝の気持が綴られていた。「私のために後悔はしてほしくはありません。私はだれもができなかったようなやりがいのある、満足に満ちた充実した人生を送ってきました。自分がしたいことの多くをやりとげた感じがします。私の心残りは、あなたを寂しがらせることとロジャーの件……書きたかったことは、私たちが分かち合った喜びや慰み、楽しみ……私はあなたの楽しい記憶の中で生き続けることができればと念願します」(542) と語る。なお夫スタンリー・フリーマンに関して、彼は二人の関係を暖かく見守り、３人で会うときには二人の写真を撮っている。また女性ばかりのなかで育ったロジャーの父親としての役割も果たしている（リア　385)。

結局最後までカーソンを支えたのはドロシーの存在だったと言っても過言ではない。1964年４月14日カーソンは帰らぬ人となった。葬儀は兄が大規模に行ったが、これとは別にカーソンの遺志をついで、簡素な形で友人たちだけで行われ、ドロシー宛の手紙の一節「モナーク蝶」が読まれた (668－69)。遺灰は死後ドロシーのもとに届けられ、ドロシーはカーソンの望み通り、メインの岩礁海岸に撒いた。実はドロシーにとって悲劇はそれだけではなかった。カーソンが亡くなる３ケ月前、ドロシーは夫を心臓発作で亡くしていたのである。愛する二人をわずかな期間で失ったドロシーの悲しみは計り知れない。彼女の悲しみを癒してくれたのは、孫娘マーサであった。ドロシーのその後の生活は、マーサが『書簡集』のエピローグで語っている。それによると、ドロシーは1968年まで今まで住んでいた自宅で居住し、その年沿岸警備隊の元船長と再婚して、別荘のあるサウスポートに移った。そこはカーソンとドロシーが友情を育んだ地であった。しかしその結婚生活も夫が２年後に亡くなることで、終わりを迎えた。1978年彼女は80歳で他界した (Freeman 545)。手紙は孫娘に託された。生前ドロシーは書簡集の出版を望まなかったが、孫娘マーサには公表することを認めていた。というのは、「手紙の中

にはカーソンの美しい文章があり、後世の人々に共有してほしい」(xvi-xvii) というドロシーなりのカーソンに対する最後の思いやりがあったからである。

## むすび

人の一生を授業時間１回分（90分）で紹介することも、今回のように３回（90分×３）で紹介することも、自分の人生を暴かれたくない当人にとっては迷惑千万なことであろう。しかしカーソンの真意を伝えるためにはやむをえない過程だった。作品の解釈、自然観、エコロジー観、環境に対する姿勢などは他で触れたので、[5] 本稿はあくまでもカーソンの生涯をどのように教えるべきかに焦点を絞った。カーソンの人間的魅力を優先したために、従来の文学的解釈中心とはならなかったが、授業の残り10回分で、カーソンの作品解釈にあてた。カーソンという人物の導入部としては受講生に関心を持ち続けさせたのではないだろうか。事実は小説より奇なりとよく言われるが、カーソンの生涯は小説以上に興味深いエピソードで満たされ、その内容の深さからして、カーソンの生涯は大学生にとって学ぶに値する。カーソンの生き方には尽きない魅力があり、受講生が自らの生き方に重ね合わせて、自然や環境のことを考える機会になればと切に思わざるをえない。まずは人となりや時代背景をしっかり把握させた方が、人文学的な環境研究に対するアプローチとして教育効果があると判断した次第である。

なお一方的な講義は学生に負担を強いるのみで、適宜カーソンの生涯に関するビデオを鑑賞した。映像による授業も学生にとってはインパクトがあり、モチベーション向上につながることを期待した。

## 注

1．上岡克己「レイチェル・カーソンと自然保護運動」『国際社会文化研究』第11号（2010）より引用
2．上遠訳では「私は何者であり、なぜこの大学に入ったのか」となっている。
3．上遠訳では「船の灯」となっている。
4．マーサが所有するのは750通。そのうちの3/4がカーソンからのもの、カーソンがドロシーの手紙を処分した（Freeman xvi）から推測した。
5．上岡克己「カーソンが愛した作家ヘンリー・ベストン」『国際社会文化研究』第10号、「レイチェル・カーソンと自然保護運動」同11号、「レイチェル・カーソンと環境保護運動」同12号

## Works Cited

Carson, Rachel. “Who I am and Why I Came to P.C.W.” *Rachel Carson Collections*, College Archives, Chatham University.

_____. “The Master of the Ship’s Light.” *Rachel Carson Collections.*
Coote, John O., ed. *The Norton Book of the Sea.* New York: Norton, 1989. Print.
Freeman, Martha, ed. *Always, Rachel: The Letters of Rachel Carson and Dorothy Freeman, 1952-1964.* Boston: Beacon Press, 1995. Print.
Raban, Jonathan, ed. *The Oxford Book of the Sea.* Oxford: Oxford UP, 1992. Print.
Tanner, Tony, ed. *The Oxford Book of Sea Stories.* Oxford: Oxford UP, 2010. Print.

浅井千晶「レイチェル・カーソンと海の文学」 上岡・上遠・原共編著『レイチェル・カーソン』、ミネルヴァ書房、2007. 49－61.
カーソン、レイチェル / 古草秀子訳『失われた森』、集英社文庫 、2009.
服部道夫「『センス・オブ・ワンダー』とネイチャーゲーム」『レイチェル・カーソン』、141－52.
ブルックス、ポール / 上遠恵子訳『レイチェル・カーソン』、新潮社、1992.
リア、リンダ / 上遠恵子訳『レイチェル――レイチェル・カーソン「沈黙の春」の生涯』、東京書籍、2002.